

高校生の歴史意識と必修「世界史」の構想

都 築 亨

1. はじめに

このごろ、中学生の「歴史嫌い」だとか、高校生の「世界史離れ」が論議の種になっている※(1) 出版界、読書家層の中での「歴史もの」ブーム、「歴史」志向が顕著につづいているにもかかわらず、それらは一部読書人、好事家の懐古趣味に止まって、ヤング世代の中には「歴史的現実」からの逃避状況、刹那主義、享楽志向が支配的であり、中学生、高校生の学習に対する意識にもこうした傾向が反映している。難解なもの、点数のとれない科目から距離をおこうとし、歴史とくに「世界史」を受験科目からはずして、共通一次で点のとれそうな科目に目をうつし、受験科目として「世界史」を選ぶ意欲のある者でも、受験めあての勉強は「歴史」をより暗記ものとして受け止め、テレビにおけるクイズ番組の花ざかり状況は、3択的問題意識の中に「歴史の内容」を埋没させてしまっている。

そうした状況の中で、高校の新教育課程で「現代社会」のみが社会科の必修科目とされ、「日本史」「世界史」が他の3科目とともに選択科目とされたことは、ますます高校生の学習関心領域の中から「世界史」を遠いものにしてしまう可能性をもっているといえよう。

「日本史」「世界史」がたとえ選択科目であったにしても、必修の「現代社会」の中で、充分歴史的問題意識が喚起され、たとえ「世界史的内容」がそこに盛り込まれなくとも、「現代社会成立の歴史的背景」が「現代社会」学習の大きな柱に位置づけられているならば問題とするのではない。しかし、新指導要領講習会での教科担当官の改訂の趣旨を聞く限り、それとは逆の意味をつよく指導されていたし、現実にはでき上がった21種類の「現代社会」教科書を開いてみて、私の懸念が杞憂でなかったことはますますはっきりしたのである。

もし「現代社会」に共通してみられるような歴史的視座を欠落したままで投影された社会認識が、新教育課程での「現代社会認識」のモデルであったとしたら、現実のヤング世代の没歴史感覚、「ナウ」い価値感覚と照らして考えたとき、そのまま放置できない陥穽を社会科教育自からが掘っているとしか言えない。

それで果してよいのだろうか。ヤング世代、中学高校生のナウさを求める感覚に社会科教育が追随し、必

修科目中の「現代社会のなりたち」について、「現代社会の成立についての歴史的過程に深入りしたり、細かな知識の習得に終ったりすることにならないように」配慮し、日本文化再評価の気運を感じさせるこのごろの出版界・ジャーナリズムの風潮の中で「自らが属する社会の基盤となっている生活文化とそこに流れる伝統を理解して、自己形成の課題を明確にし」…「受けつぎ発展させていく意欲を育てる」※(2) ことが「現代社会」のねらいとする歴史意識であるとしたら、やはり困ったことだと私は思う。

世の中の趨勢はたしかに没歴史的であり、「その日暮し」の経済感覚に支えられ、「ナウ」きに目を奪われ、逆に「時代もの」「歴史もの」懐古趣味に傾斜する。しかしそうだからこそ、なお更に「歴史」に裏うちされた社会認識を、中学校・高校の授業を通じて育ててゆくことこそが、現在の社会科に課された役割りではないだろうか。

こうした観点から本校では、新指導要領によるカリキュラムを検討し、本年から後述するように高校2・3年を通して、2単位ずつ計4単位の必修「世界史」を設定し、それと併行して「日本史」「地理」の選択科目をおくことにし、現在実施中である。その成果についてはまだ公表できることではないので、とりあえず本稿では、その「世界史」必修プランの概要をまとめ、今後の指導について御指示を得たいと考えている。

2. 「現代社会」の歴史意識

現指導要領にはじめて登場した「現代社会」について今少し、たしかめておきたい。前述のようにこの新科目の中では「歴史的背景」に関する学習内容は意識して隅っこにおいやられた。「現代社会の成立」について、その「歴史的過程に深入りしない」ようにというコメントもさることながら、その科目全体の構成の中で歴史的内容は極力おさえられている。

「現代社会」は社会科の唯一の必修科目であり、これは、その後2～3年に学習を予定されている選択科目「日本史」「世界史」「地理」「倫理」「政経」の履習について「基礎ともなるように配慮されている」とすれば、「日本史・世界史」や「政経」の中心的学習は本来「現代社会」の中に包括されるべきものでは

なく、せいせいそれらの科目の「オリエンテーション」としての役割を担うものとして位置づけられたのではあるが、それにしても、この新科目の中での「歴史」的内容の欠落はどのように考えたらよいのだろうか。

「現代社会の成立」について、その歴史的背景に深入りしないように、というコメントはわからぬでもない。その歴史過程を学ぶことは即ち世界史なのだから、この新科目の1/3以上のスペースは必要かもしれない。それを極力抑えることは容認できるにしても、「政治経済」的内容と「倫理」的内容をあわせると、ほぼ45.8%（教科書21種についての平均で示す）※(3)を占めているのに対し、世界史・日本史については「世界諸地域の文化と文化交流」「日本の生活文化と伝統」の2つの小項目について、多少ともその歴史的形成、伝統性文化の交流を学習する程度である。

教科書によっては「世界諸地域の文化」を東アジアの文化」「中南(ブラック)アフリカの文化」「ヨーロッパの文化」「北アメリカ・ラテンアメリカの文化」に分けて記述したり、「東アジア文明圏」「インド・イスラム文明圏」「ヨーロッパ文明圏」というように※(4)かなり世界史の文化圏学習を意識した形で※(5)或は和辻哲郎「風土」の発想で風土と文化から把え、※(6)次に「シルク・ロード」や「草原の道」の項目で、その交流に頁をさいているが、大半の教科書は「文化の多様性」「伝統」「文化の交流」について一般的叙述を2～3頁にわたって試みる程度で終わっている。とても、歴史について、「オリエンテーションの役割」を果すものとは考えられず、オリエンテーションというのがこの程度でよいと考えるのなら「政経」「倫理」の比重は重きに過ぎると言わねばならない。

「環境」「資源」「エネルギー」「人口問題」等の項目を通じて、地理的学習内容はそれなりに「現代社会」に位置づけられている。この新科目がエコロジーの視点をその中に収め、更には文化人類学的内容をもその視野に入れていることについてはかなり正当に評価できる※(7)にしても、「現代社会」の形成、その歴史的側面について学習が意識的に削除され、世界諸地域の文化についても、文化人類学・民俗学の片鱗をうかがわせる程度で終わっているとしたら、むしろ項目を削除した方がすっきりするというものである。

世界諸地域の文化を文化人類学の視点から考察すること自体無意味ではない。しかしそれはその中に人類文化のおかれた歴史的状況、進歩と発展についての省察を加えないで眺観したとすれば単なる物識りに終わってしまうであろう。「現代社会」を歴史的・発展的シエーマの中で把える様に再構築するか、それでなければ「歴史」を必修とするか、どちらかの改革は早晩とられねばならない体のものである。

3. 新教育課程での「日本史」「世界史」の位置づけ

新教育課程では先述のように「日本史」「世界史」は他の科目と並んで2・3年の間において「生徒の興味関心に応じて」選択すべき科目とされた。

従前の3単位が4単位とされたのは妥当だとしても「内容の精選」と「選択科目」化されたことによる高校生の歴史認識形成の条件はいちじるしく困難化、ないしはせめられたといえないだろうか。

「日本史」の改訂の要点として「指導要領解説」では次の3点をあげている。即ち、1. 内容の精選・再構成、2. 「地域社会の歴史と文化」の位置づけ、3. 主体的学習活動の展開のための学習の重点化——「主題学習」

問題は1. の「内容の精選・再構成」の方向であろう。小学校では「日本の歴史上の人物と文化遺産を中心とした学習」中学校では「日本の歴史を中心としそれに関連する世界の歴史を合わせた通史的学習」、その上立つ高校の「日本史」では「日本の文化の形成と展開を、歴史の流れや当時の社会との関連のもとに総合的に考察される。いわば文化の総合学習」をすることとされている。通史学習としては中学校の「歴史的分野」の学習ですでにすんでいるはずである。だから高校ではかなりそれとは違った内容が考えられねばならないのは当然である。しかも新しく選択科目になったとすれば既習の歴史内容の上に思い切ったユニークな構成があつてよいはずである。しかし、この指導要領に準拠した検定教科書の各内容構成を検討すると、(これらの教科書を合格させた教科書検定過程の中で指導要領改訂の本意を推測すると)既成の「日本史」の枠組みからほとんどはなれていない。(7)の地域社の歴史と文化、はほとんど教科書の記述には変化を生じていない)要するにこの「日本史」の選択科目としての意味は、中学の「通史」をより詳しく、文化に比重を置いて学習するという含みであり、それは現実の高校教育の場では受験科目として意識される。

「世界史」はどうか。同様に指摘すれば、改訂の要点は1. 内容構成の上で文化圏を18世紀ごろまで下げるよう構成し、2. 文化圏学習を拡充充実させ、また3. 主題学習により重きをおいた。ということになる。

「文化圏学習」の構成は旧指導要領から一貫してとられている形であり、又その流れは、日本史の「文化の総合学習」と対応してみると、社会科全体の教育課程の中での「文化」志向としてうけとめられる。

しかし、旧指導要領の場合と同じく、「文化圏」が古代中世(近代以前)の歴史的世界形成理解のための便宜的枠組みとしてうけとられ、「同時代全面的把握」の観点からではなく、東アジア・西アジア・ヨーロッパのそれぞれの文化圏における「歴史の発展や特色を

把握させ、文化圏としてのまとまりに着目させる」^{※(8)}という観点から構成されているとしたら、それが今回の改訂で「18世紀まで下げ」られるということは、それまでヨーロッパ中心史観で構成されてきた16～18世紀の歩みを各文化圏に解消して、その意味で「それぞれの」文化圏の中での展開過程の中に平等に位置づけ、19世紀から「世界市場の形成と結びついて地球上の広い地域の人々の生活が相互に深く関連し合うようになったことを踏まえ、この時期の内容を一本に」^{※(9)}まとめようとした点に多少の意味をみつけ出すことはできる。

しかし、その方向はかえって逆に今迄ユニークな位置づけであったムール帝国、明、清、市民革命に関する記述をそれぞれ、東アジア・イスラム圏、近代ヨーロッパの中に延長するだけに終り、30年前の東洋史・西洋史（それに中洋を入れた）の構成にもどっている面すらうかがわれる。「同時代全面的把握」という視点は全く失われてしまった。

新指導要領にもとずいて編集された新「世界史」教科書の中で、実教出版の「高校世界史」のユニークな構成の教科書は姿を消した。これも淋しいことである。

そして結果としては3単位が4単位に上げられたこともあってか各社の教科書は一様に詳しく「充実」されている。これは「精選」に逆行する。

ヨーロッパについての記述だけを点検すれば、たしかに「簡略化」「まとめて記述する」形がとられその意味で「精選」は考慮されているが、全体としては必ずしもそうではない。ただ教科書分析がこの稿の本旨ではないので、この程度で止めておこう。

新教育課程の中で、附則2項に「現代社会」の履習については、当分の間、特別の事情がある場合には、「倫理」及び「政治・経済」の2科目の履修をもって替えることができる。とされたことは、次いでとられた共通一次の必修科目のとり方の指定とともに、「倫理」「政治・経済」の位置づけを規定することとなり、これと、「日本史」「世界史」「地理」の3科目とは、その位置づけにおいてかなり異った様相をみせることになった。同様の選択科目であっても「日本史」は先述のように中学の「通史」の上に「より詳しく」学習するという選択であってみれば、この新課程の中での選択科目でユニークな位置を占めるのは「新科目ともいえるべき」地理と、「世界史」の2科目である。「地理」についてここでふれる余裕はないが、「世界史」は、「日本史」とは異なり、中学校まででほとんど学習をしていない分野に属する（中学校では旧指導要領より世界史は思い切って削除された）科目である。選択科への「オリエンテーション」的役割も含めて1年の必修となった「現代社会」の中で、ほとんどその興味を

喚起するための学習すらできないだろうと思われるのが実情であってみれば、中学校の「歴史的分野」や「現代社会」から「世界史」を選択しようとする考える冒險的精神の持ち主か、他の分野に期待を失った生徒達ぐらいしか「世界史」選択希望者は出て来ないだろうし、共通一次の第1回・第2回にみられた如き「世界史」の難かしきは、更に生徒の「世界史」選択の意欲を阻喪させる。困ったことである。

しかしかれわれは末修得の分野だからということと更に加えて、現在の状況の中で最も必要な社会認識、歴史認識は「世界」にかかわるものであるという観点から「世界史」を高校での「必修科目」に位置づけることはできないものか、検討を重ねてきた。具体的なプランは後述することにして、「世界史」を必修化することが、新教育課程を通して形成されるべき社会認識に活性剤を与えることになると考える。

4. 高校生の「歴史」についての興味関心

指導要領では特に「生徒の主体的意欲的な学習活動」をすすめるために「主題学習」のより一層の充実を期待しているし、主題の選定に当っては「できるだけ生徒の興味や関心に即したものを考慮し、高度で専門的なものとならないように」^{※(10)}との留意事項もつけている。

「主題学習」の場合に止らず、歴史学習のすべての場面を通じて生徒たちの興味と関心が学習のよすがとなるであろうという程度のことは付言すべくもないであろう。

今年1月早々、盛岡で開かれた日教組の教研集会は、教科書問題後の状況にもかかわらず、盛り上りを欠いたままに終始したと伝えられるが、その中の1つの報告は無視できない内容をもつものであった。中学生・高校生の「歴史離れ」について新潟県立柿崎高校での調査によれば、高校1年生の82%が最も嫌いな科目に社会科を挙げ、それに対して数学が嫌いな科目だと答えた者は僅か29%であるという。しかも歴史は暗記科目だからという回答が圧倒的多数であり、さらに、気になることは「いつから嫌いになったのか」というアンケートに対して、ほとんどの者（75%）が「中学の時から」と答えているとのことであった。^{※(11)}

もしそうだとしたら、興味と関心にそいながら「歴史」学習を考え、「主題学習」を試みるということはまさしく砂上に楼閣を築くことになるであろう。

われわれの必修「世界史」カリキュラムを構案するにあたって、われわれの土台を調査しなければならないという必然性から、中学・高校生が「歴史」の授業に対してどのような興味・関心を示し、どのような構えで授業にのそんでいるかをアンケート調査した結果

高校生の歴史意識と必修「世界史」の構成

は次の通りである。

(1) 歴史は好きな教科に入るか、それとも嫌いな教科に入るか、これから「世界史」を学ぶ2年の生徒133名と、「世界史」を一応学習した後、「日本史」を、これから学ぶことにしている3年の生徒132名に同様な質問をした結果である。

	2年	3年	計	%
好きな科目である	56	65	121	45.7
どちらでもない	56	40	96	36.2
嫌いな科目である	21	27	48	18.1

(2) いつごろから好き(嫌い)になったのか。

	2年	3年	計	%
物心がついてから	3	10	13	6.8
小学校の時から	45	43	98	51.8
中学校のころから	29	26	55	35.2
高校になってから	0	18	18	9.5

新潟教組の報告では中学校のときから80%が歴史嫌いになったといわれていたので多少意識してアンケートをしたきらいはあるが、(1)で歴史を好きな科目と答えた121名、および嫌いな科目と回答した48名についてそれぞれ検討してみると次の通りである。

(3) 好きな科目と答えた者がいつごろからそうなったか

	2年	3年	計	%
物心がついてから		7	7	5.8
小学校のころから	37	36	73	60.8
中学校のころから	19	14	33	27.5
高校になってから		7	7	5.8

(4) 嫌いな科目と答えた者はいつごろからそうなったか

	2年	3年	計	%
物心がついてから	3	3	6	12.7
小学校のころから	8	7	15	31.9
中学校のころから	9	10	19	40.4
高校になってから		7	7	14.9

(5) 歴史は次の各教科(科目)のうちで何番目に好きな科目ですか。

国語 地理 社会(現社) 数学 物理 化学 生物
地学 保健 体育 芸術(音・美・書) 家庭科 英語

	2年	3年	計	%
1番目	6	11	17	6.3
2番目	14	15	29	10.9
3番目	30	20	50	18.8
4番目	19	18	37	13.9
5番目	15	22	37	13.9
6番目	15	9	24	9.0
7番目	12	14	26	9.8
8番目	8	8	16	6.0
9番目	5	3	8	3.0

10番目	5	6	11	4.1
11番目		2	2	0.7
12番目	3	3	6	2.2
13(最もきらい)	1	2	3	1.1

(1)で好きな科目に属すると答えた者はここで(1~4)番目までにあげた数と一致し、嫌いな教科と回答した者の数は、ほぼ8番目以下に歴史をおいている。

この限りでは「歴史離れ」はみあたらないといつてよいであろう。むしろ歴史は「好きな科目」なのである。これは大事にしたい。

(6) 日本史と世界史はどちらが好きですか。

	2年	3年	計	%
日本史	49	54	103	39.1
同じ位	43	40	83	31.6
世界史	39	38	77	29.3

(7) 歴史の中で、自分として特に関心のあるのは次のどの分野ですか。

政治史か、経済史か、外交国際関係か、あるいは文化史、又は人物・伝記に属することか。

	2年	3年	計	%
政治の流れ	12	20	32	12.1
経済や社会	25	12	37	14.0
外交国際関係	17	20	37	14.0
人物や伝記	46	53	99	37.5
文化	34	25	59	22.3

(8) 各国の歴史の中で特に興味のあるのは次のどの国か

	2年	3年	男子	女子	計	%
ア日本	60	68	63	65	128	16.8
イ朝鮮	5	4	4	5	9	1.2
ウ中国	40	51	49	42	91	12.0
エ東南アジア	7	6	7	6	13	1.7
オインド	12	6	10	8	18	2.4
カ西アジア	6	10	10	6	16	2.1
キアフリカ	13	11	7	17	24	3.2
クイギリス	33	28	29	32	61	8.0
ケフランス	29	30	22	37	59	7.8
コドイツ	15	16	14	17	31	4.0
サイタリヤ	27	33	30	30	60	7.9
シギリシア	41	32	36	37	73	9.6
スイス	14	11	11	14	15	1.4
スペイン	2	1	1	2	3	0.3
オランダ	15	17	17	15	32	4.2
ソソビエト	8	8	5	10	15	2.0
タ東ヨーロッパ	44	44	40	46	86	11.3
チアメリカ	9	3	4	8	12	1.6
ツ中南米	14	15	15	14	29	3.8
テオーストラリア						

(9) 次の新聞の記事やテレビドラマなどで興味があったことに○をつけなさい

	2年	3年	計	%
ア 夏王朝の遺跡発掘	21	22	43	16.3
イ 高松塚古墳の記事	17	18	35	13.3
ウ 最古の木造回廊発掘	19	17	36	13.7
エ 「マリコ」	24	29	53	20.1
オ 「シヨーグン」	27	33	60	22.8
カ 「徳川家康」	48	47	95	36.1
キ 「峠の群像」	29	40	69	26.2
ク マヤ・アラスカ文明	32	34	66	25.1
ケ シルクロード	53	39	92	35.0
コ 「ガラスのうさぎ」	36	33	69	26.2
サ 「戦争の嵐」	29	28	57	21.7
シ 「黄金の日々」	36	40	76	28.9

歴史についての関心のより所は、現在では先づテレビ・ドラマであり、テレビの特集番組である。特集番組についての関心度も比較的高いし、テレビを利用しての授業のすすめ方も考えるべきテーマであろう。

5. 必修「世界史」の構想と実践

新教育課程を本校において索定するに当って、先に現在の高校生の(前述の)意識と関心を確かめ、そこからプランを構築したわけではない。よしんば、生徒の意識関心が世上传えられる如く「歴史嫌い」「世界史離れ」に低迷しているのが事実だとしても、今迄に「世界史」について殆んど学習らしい学習の場を持たなかった生徒に対して、何らかの形で「世界」にかかわる歴史認識の場を確保できないものか、できれば全員に「必修」の「世界史」を新カリキュラムの中で正當に位置づけることができないものか。というのが本意である。

「今日の高校生の実態からみて、すべての高校生に「世界史」を必修させ、それを通して歴史的教養や人生・学問への態度を期待することは無理である。」^{※(12)}という見方もたしかに一方に存在する。これは選択制の論理である。多分すべての高校生に高度の歴史的教養や政治学者・経済学者になる者への学問の基礎的資質として世界史を学ばせることはできないし、「世界史離れ」をより顕著にするだけである。しかし、歴史を大学での専攻分野とする生徒に対してではなく、理科系コースを選ぶ生徒やそのまま就職の道を選ぶ高校生たちに対してこそ、世界にかかわる歴史的社会的認識をひろげてやるのが、現在最も必要なことではないだろうか。「世界史」を必修科目に位置づけたわれわれの意図は個条書きすれば次の通りである。

(1) 日本史を中心に学習する中学校「歴史的分野」だけでは、「現代の世界」の歴史的形成過程を把握す

ることは不可能である。中学校で「世界を中心とした歴史」を学び、高校で「日本史」か「世界史」を選択させる方がよいのかもしれないが、現実には中学での内容を変改できないとすれば、高校のどこかで「世界史」を全員に学ばせたい。

(2) 就職する生徒達にも「世界」に対する視野と展望をあたえねばならない。必修の「現代社会」では現在の政治や経済についてかなり時間的にも大きな比重をおいて学習するのにその歴史的形成過程は意識してきている。中学校の「歴史的分野」でのヨーロッパやイスラム世界についての学習だけでは不十分である。

(3) 理系選択の者にも「世界史」は学習させたい。科学・文明の歴史的形成は「日本史」では限られた認識になり、中学のそれでは不十分である。理系選択者が社会科を1科目しか選択できないとすれば、その中で「世界史」を選択する可能性は著しく制限されるが、大学で自然科学的方面に進むとすれば、より世界的視野で「文明」「技術」「思想」にかかわる歴史的学力が必要とされる。

(4) 2～3年の社会科選択コースを確定するのに本校の様な小規模校(学年各3クラス)では、細分化した展開は不可能であり、何れか1～2科目は必修にしたい。

(5) 「日本史」「地理」は中学校からの学習内容を考えると、全員にその内容を履習させる根拠に乏しく、(そうなれば、社会科は全科目必修→20単位)「倫理」「政経」は「現代社会」とのかかわりを考慮すればこれも全員に履習させるまでもない。

(6) 「世界史」を2～3年で全員必修としながら、同時に併行して選択履習する「日本史」との関連を意識して内容の精選をはかれないか。(そこまでは今年度できないだろうが)

必修「世界史」構案の視点

(1) 5世紀以後をおいた「世界史」を。

「文明の起り」に関する原始・古代の歴史学習は中学校の「歴史的分野」にもその位置を与えられた内容となっている。

したがって思い切って古代はその学習内容から除きほゞ5世紀以後を「世界史」の学習内容として再構成する。

4～5世紀は日本で大和國家の形成期にあたり、東アジアでは漢帝國滅亡後の北方遊牧民族の華北侵入、江南の開発期、ヨーロッパではローマ帝國解体～ゲルマン民族の大移動、現在のイギリス・フランス・ドイツの國家形成期、やや時期をおいてアラビア・西アジア、北アフリカにはイスラム世界が形成される。この時期を「東アジア」「ヨーロッパ」「イスラム」各文

学習課題	学 習 内 容	学 習 指 導
ヨーロッパ文化圏	<p>2. ヨーロッパ世界の形成と発展</p> <p>(1) ゲルマン民族の世界 西ローマ滅亡 東ゴート王国 トウル・ボアチェ カロリング朝の成立</p> <p>(2) ビザンチン帝国 ユスチニアヌス帝 軍管区制 ビザンチン文化 ビザンチン様式 聖像禁止令 西ローマとの対立</p> <p>(3) フランク王国とその分裂 カロリング朝の成立 カール大帝 東西フランク王国</p> <p>(4) 神聖ローマ帝国</p> <p>(5) 西ヨーロッパ封建社会 ノルマンの活躍 イギリスノルマン王朝 封建制度 荘園と農民</p> <p>(6) 教皇権の隆盛 修道院運動 クリューニー修道院 叙任闘争 カノッサ事件 教皇権の最盛 イノケンチウス3世</p> <p>(7) 西ヨーロッパ中世文化 騎士の文化 神中心の文化 神学 教会 建築</p>	<p>ローマ帝国の東西分裂を軽く指摘したのち、その北方のゲルマンの動向にふれる。 フランク王国がゲルマン諸族の中でただ一つ存続できた条件について。 ビザンチン帝国の最盛期を中心にその帝国の特殊性にふれ、ビザンチン教会とローマカトリック教会との対抗の経緯 ユスチニアヌス帝の時代を中心にその汎図のひろがりやビザンチン文化について視覚的に把握させる。 聖像禁止令を契機とする東西教会の分離状況にふれ、フランク王国とローマカトリック教会との接近状況を理解させる。 ノルマンの活躍を封建社会成立の一つの要因としておさえるが、その前から成立していた封建制の柱と成立の条件について。</p> <p>ローマカトリック教会の強大化とその腐敗状況も。</p> <p>ヨーロッパ中世文化の特質を把握させ、視覚教材による確認も。</p>
イスラム文明圏	<p>3. イスラム世界の形成と発表</p> <p>(1) イスラム以前の西アジア パルチア ササン朝 アラビアの情勢</p> <p>(2) マホメットとイスラム教の成立 予言者マホメット イスラム教 コーラン</p> <p>(3) アラブ帝国 正統カリフの時代 ウマイヤ朝 スンナ対シーア派</p> <p>(4) イスラム帝国の最盛期 アッパス朝 ハルーン・アル・ラシッドの時代</p> <p>(5) イスラム世界の分裂と発表 後ウマイヤ朝 アルハンブラ宮殿 ブワイフ朝 武家政治 ファーティマ朝 シーア派イスラム インドの諸王朝</p> <p>(6) イスラム文明の発表 イスラム固有の学と外来文化 東西文明の交流 インドのイスラム化 カズナ朝 ゴール朝</p> <p>(7) セルジュック帝国 中央アジア サーマン朝 セルジューク・トルコ ニザーム・ル・ムルク</p>	<p>マホメットの生涯について紹介し、そこから教団の成立とコーランの内容に関してふれる。</p> <p>「アラビアンナイト」の紹介からバクダットの繁栄とアルラシッドの時代のイスラム世界の発展について理解させる。 他のいくつかの王朝は簡単にして後ウマイヤ朝、ブワイフ朝、ファーティマ朝についてのみ対抗関係をつかませる。</p> <p>イスラム文明については、アッパス朝の最盛期に焦点をおくか或は、そのまとめとして(6)に位置づけるか、何れかにする。</p> <p>セルジュックトルコの扱いについてはそれ以前の中央アジア諸王朝はただふれるだけにし、後から学ぶ十字軍の前提とする。</p>

高校生の歴史意識と必修「世界史」の構成

学習課題	学 習 内 容	学 習 指 導
十字軍とモンゴル帝国	<p>4. 十字軍とモンゴル帝国をめぐるユーラシア世界</p> <p>(1) 十字軍とその影響 十字軍の背景 第1回十字軍 第3回第4回 レコンキスタ 東方植民活動 十字軍の影響</p> <p>(2) 都市と商業の発展 貨幣経済 遠隔地商業 ギルド 都市の自治 自由都市 都市同盟</p> <p>(3) モンゴル大帝国の成立 チンギス汗 金の滅亡 バトウの西征 モンゴル帝国分裂と四汗国</p> <p>(4) 元の中国支配 フビライ 元朝成立 漢民族支配</p> <p>(5) 東西の交流 ヨーロッパ・イスラム商人の来訪 マルコポーロ</p> <p>(6) マムルク朝とチムール帝国 マムルク朝エジプト レコンキスタ チムール帝国 チムール オスマントルコ 明との対抗</p>	<p>十字軍についてはそれ以前のヨーロッパの経済的背景，東西教会の関係からなせ十字軍がおこされたかを学習する。</p> <p>地図の利用。</p> <p>遠隔地商業の発展を中心として経済社会の変容，都市の形成，都市の性格について。</p> <p>モンゴル帝国の支配圏のひろがりとそのひろがりのピークにおいて早くも四汗国の分立，フビライと諸汗国の抗争が起っていたことを指摘し，中国風王朝の元に変容してゆく過程を把握させる。</p> <p>壮大な文化交流の時期として，この時期のヨーロッパ宣教師，旅行家イスラム商人の活動にふれる。</p> <p>マムルク朝，イル汗国，十字軍，チムール帝国との対抗関係</p>
ヨーロッパの変動	<p>5. ヨーロッパの社会と文化の変動</p> <p>(1) 封建社会の崩壊と教皇権衰退 荘園制の崩壊 農奴解放 教皇権衰微 教会分裂</p> <p>(2) 中央集権国家の台頭 イギリス マグナカルタ議会 百年戦争 ドイツ イタリアの情勢</p> <p>(3) ルネサンスとヨーロッパ人の対外進出 イタリア，ルネサンス ヒューマニズム 西ヨーロッパ 北方ルネサンス インド航路の開拓 ポルトガル アメリカ大陸へ インカアズテカ征服</p> <p>(4) 宗教改革と西欧絶対主義国家 ルターの宗教改革 ドイツ農民戦争 カルバンの改革 反宗教改革 スペイン イギリス国教会の成立 イギリス絶対主義 オランダ独立 ユグノー戦争 フランス絶対主義</p>	<p>十字軍以後のヨーロッパの荘園制の崩壊と農奴解放，農民一揆</p> <p>イギリス，フランスの王権の伸長と議会とのかわり，そして百年戦争。</p> <p>(以下略)</p>

- ※(1) 「歴史地理教育」 № 350
「歴史と地理」 山川出版 315号
- (2) 高等学校学習指導要領解説 社会編 34頁
- (3) 拙稿「原代社会考」 名大教育学部附属紀要 27集
- (4) 自由書房「現代社会」一橋出版「現代社会」
- (5) 帝国書院「高校生の現代社会」
- (6) 実教出版「高校現代社会」
- (7) 拙稿「現代社会考」
- (8) 指導要領「世界史」3内容の取扱い(1)のイの(イ)
- (9) 高等学校学習指導要領解説 社会編 99頁
- (10) " " " 112頁
- (11) 中日新聞 昭和58.1.22
- (12) 小林哲也「世界史」教育の改善を望む
「歴史と地理」 330号所収